

ぼくはみんなのたからもの

ぼくは、すずめのピッピ。さんにんきょうだいのいちばんうえのおにいちゃん。かぞくは、おとうさん、おかあさん、おとうと、いもうとがいる。みんなだいすきだけど、おとうさんとおかあさんは、いつもおとうとやいもうとのことばかりかわいがっているんだ。

「おとうさん、だっこしてよお。」

といっても、

「ピッピはもうおにいさんだろ
う？」

って、だっこしてくれないの。

おとうとやいもうとは、いっぱい
だっこしてもらっているのにな。

「おかあさん、あのね、きょうね
…。」

と、おはなししようとしても、

「ちょっとまってね。おかあさんね、いまからあかちゃんをねかせてあげないといけないの。」

っていわれちゃう。ぼく、いつもまっているのにおかあさんはすぐにおすれてしまうんだ。

もう、おにいちゃんなんていやだ！ぼくは、とてもかなしいきもちになって、いえをとびだした。そとはじゆうにとべるし、どこにだっていける。そらをとんでいるうちに、たのしいきもちになってきた。でもそのとき、バサッ。バサッ。

うしろからおおきなカラスがぼくをおいかけてきた。こわかったけど、あきらめたらつかまってしまうので、ぼくはちからいっぱいにとんだ。

すこしずつちからがなくなってきたとき、かくれるあなをみつけた。

「よし、あそこならおおきなカラスは、はいれないぞ。」

カラスはあなのいりぐちまできたけれど、はいれないことがわかるとくやしそうにとんでいった。(ああ、こわかった。おうちにかえりたいよ。) そうおもってとぼうとしたけれど、つかれてはねがうごかなくなったんだ。

「おとうさん、おかあさん、うごけないよ。たすけて。」

ぼくはなきながらさげんだ。

「すずめさん、どうしたの？うごけないの？せんせい、よんでこよう。」

というこえがきこえて、こどもたちがちかづいてきた。はじめはこわかったけど、こどもたちはとてもやさしかったよ。わらをしきつめた、やわらかいふとんのうえにねかせてくれて、みずをくれたり、やさしくこえをかけたりにしてくれた。みんなのはなしをきいているうちに、ここがようちえんだとわかってきた。(『やさしくしてもらうのってうれしいなあ。ぼくもこんなやさしいおにいちゃんになりたい!』)

みんなにやさしくしてもらっているうちに、かぞくをおもいだしてさみしくなってきた。そのとき、とおくから

「ピッピ、ピッピ〜ィ、どこにいるの。」

と、おとうさんとおかあさんのこえがきこえてきた。こえをきくとうれしくて、なみだがいっぱいできてきた。

「おとうさん、おかあさん、ここだよ。ぼくはここにいるよ。」

と、ちからいっぱいにさげんだ。ぼくのこえがとどいたようで、おとうさんとおかあさんがぼくをみつけてくれた。

やっとおとうさんとおかあさんにあえて、とてもうれしかった。おかあさんは、とてもこわいかおをして、

「どうしてかってにそとにでていったりしたの！」

となきながらいった。いつもとちがうぼくたちのなきごえにきづいたこどもたちがあつまってきた。

「すずめのおかあさんがむかえにきたみたい！」

「『いっしょにかえりたい』ってないているね。」

と、いって、ようちえんのこどもたちがぼくをそとにだしてくれた。

ぼくは、おとうさん、おかあさんのところにいそいでとんでいった。

「ごめんなさい。ぼく、さみしかったんだ。もうかってなことはしないよ。

ほんとうにごめんなさい。」

ぼくは、おかあさんのないているすがたをみると、なみだがあとからあとからでてきた。

「ぶじでよかった。みんなしんぱいしたんだよ。」

「ピッピは、みんなのたいせつなだからものだ。だいすきだよ。」

おとうさんはそういって、ぎゅっとだきしめてくれた。おとうとと、いもうともぼくをしんぱいして、ずっとないてたんだって。みんなが、ぼくのことをたいせつにおもってくれているとおもうと、なんだかこころがあたたかくなった。

ぼくたちがおうちにかえろうとしたとき、こどもたちが

「げんきでね。」

と、てをふってくれた。ぼくは、

「ありがとう。やさしくしてくれ

たことずっとわすれないよ。」

と、いって、だいすきなおとうさん

とおかあさんといっしょにかえった。

「ぼくはみんなのたからもの。だいすきなひとがいるってうれしいな。」

